書評

末木文美士著『禅の中世――仏教史の再構築』

（臨川書店・二〇二二年）

吉村　均

日本仏教研究者のあいだでは、かつての鎌倉新仏教を仏教の頂点と見る見方や、新仏教vs.旧仏教の図式が実態とかけはなれたものであることは、共通認識になってきていると言っていいだろう。そのような研究を主導してきたお一人である末木文美士先生の『禅の中世』では、新たな中世仏教像の提示と、従来の仏教理解を覆すうえで大きな役割を果たした名古屋の真福寺大須文庫の調査による新資料の発見と、それを中心に刊行された『中世禅籍叢刊』全一二巻＋別巻の内容紹介、およびそれによって得られた新たな思想家理解が紹介されている。

既発表の論文等を基にはしているが、一貫して読めるように全面的に改稿したとのことだが、重要な内容は繰り返し説かれているため、まず本書で提示された新たな中世仏教像や思想家理解がどのようなものかを紹介したうえで、個々の内容について紹介していきたい。煩瑣になるので、以下では諸先生の敬称は略させていただく。

著者は、中世仏教のはじまりを、平重衡により焼かれた東大寺大仏の復興に見る。これは後白河法皇の主導になるもので、源頼朝も協力した国を挙げてのおこないだった。勧進職を任されたのは、周辺的な仏教僧（松尾剛次の遁世僧の概念に近い）だった重源で、全国を勧進して回り、勧進には西行も参加している。その勧進職を受け継いだのが、重源と中国（宋）で知り合い、親交のあった栄西で、法然も請われて東大寺で戒律の講義をおこなっており、そこに新仏教vs.旧仏教という対立図式を見ることはできない。栄西は『興禅護国論』、法然は『選択本願念仏集』でそれぞれ禅宗と浄土宗の公認を求めたが、それは南都六宗のような学派のひとつとしての公認で、他派を学ぶことを否定する排他的なセクトを目指したものではなかった。他派を認めない印象のある親鸞や日蓮も、あらゆる考え、実践を集約したのが南無阿弥陀仏や『法華経』だと説いたのであり、仏教の諸宗派が今のような他派と切り離されてセクト化したのは、室町時代以降である。

中国からの禅の受容は、古代からさまざまな形でおこなわれており、現在のように栄西＝臨済宗、道元＝曹洞宗というような単純化はできない。

栄西は、二度、宋にわたっているが、禅を学んだのは二度目の渡宋の際であり、禅の受法、紹介を目的としたものとは考え

難い。栄西は密教についても説いており、従来は栄西について、既存の勢力への妥協、権力者へのすりよりと、低く見る傾向があり、いまだに信頼に足る著作集も刊行されていない。禅密兼修は当時の日本における一般的な傾向であり、権力者とのつながりも仏教復興を念じるためで、二度目の渡宋の後も、著作としては禅よりも戒律に関するものが多く、栄西の目指したのは戒・定・慧を具えた仏教全体の復興だった。

その栄西が批判した達磨宗は、その僧の多くが宋から帰した道元の許に参じたことで知られているが、能仁側は達磨宗という言葉を菩提達磨の後継者、禅宗という一般的な意味で用いていて、セクトとしての達磨宗を打ち立てることを考えていたのではない。栄西は自分とは違うという意味で達磨宗という言い方をしているが、批判する無修についても、表現だけを見ると栄西にもそうとられる表現はあり、実際に修行不要論を説いていたかどうかはわからない。系譜的には、栄西の受け継いだ法の方が傍流で、達磨宗の方が中国の臨済の系譜の主流を受け継いでいた。また、どちらも、『臨済録』について教えのなかで言及することはなく、『臨済録』に触れられるようになったのは、蘭渓道隆あたりからだという。

真言立川流というと、性を仏教に持ち込んだ邪宗と考えられており、江戸時代はじめに弾圧されて、文献が失われ、批判する文献からその内容を推測するしかないが、男女の性行為とそれによる受胎、出産を、さとりのプロセスになぞらえることは、当時の日本の密教では一般的な言い方で、栄西の著作にも見られる。

このように、本書は従来の仏教理解を覆し、禅を中心に新たな中世仏教像を提示している。

本書の構成は、以下のとおりである。

はじめに
Ⅰ　中世仏教の豊饒
第一章　思想史の中の中世――王権と神仏の観点から
第二章　選択から統合へ――中世仏教観の転換
第三章　中世仏教の形成――平安仏教から鎌倉仏教へ
第四章　東アジア仏教と東アジア周縁仏教――『釈摩訶衍論』の流伝を中心に
第五章　仏教と身体性
第一節　仏教の身体論――キリスト教との比較から
第二節　立川流と『受法用心集』
Ⅱ　中世禅の複合
第一章　中世禅への新視角――『中世禅籍叢刊』から見える世界
第二章　日本禅宗の形成――新資料から見た禅宗と達磨宗
第三章　栄西――生涯・著作・思想
第四章　聖一派と禅密融合
第一節　円爾――生涯・著作・思想
第二節　癡兀大慧――生涯・著作・思想

第五章　禅と諸宗の交渉――批判と融合
第六章　中世禅における言葉と知――禅密哲学序説

第Ⅰ部では、従来の中世仏教観の見直し、第Ⅱ部では、それに大きな力のあった『中世禅籍叢刊』の内容紹介と、そこで得られた知見や課題について紹介している。

「思想史の中の中世――王権と神仏の観点から」では、王権と神仏の関係を軸に日本の思想を見渡した著者の『日本思想史』（岩波新書）の図式を踏まえ、中世における王権と神仏の関係を論じている。朝廷に倣って新しい儀礼の形成に努めた鎌倉幕府の代表として、三代将軍源実朝についても詳しく論じられており、一般に持たれがちなイメージの誤解を正している。

「選択から統合へ――中世仏教観の転換」では、従来の鎌倉新仏教中心論は、プロテスタント的なキリスト教をモデルとしたもので、戦後はそれに民衆史観が加わり、新仏教＝反権力、旧仏教＝権力癒着的な貴族仏教というステレオタイプ化した二項対立の図式になっていた。本章では、その図式が成り立たないことを指摘したうえで、法然や日蓮、親鸞の教えについて見直しをおこなっている。

法然の主著『選択本願念仏集』を見ると、阿弥陀仏によって選択されたものとして称名念仏を説き、諸宗諸行を否定しているようにも見えるが、そう断定することはできない。念仏は弥陀のすべての徳を含んでいるとされ、そこにすべての真理が含まれているため他の行は不要とされているのであり、弥陀の名号は総合的なものとされている。『選択集』では、それを釈迦・諸仏が称賛することで名号の絶対性が確立するという構造になっており、阿弥陀仏を頂点とする諸仏の総合的な体系が形成されている。諸行についても、『無量寿経』の三輩段に収められることでその体系に組み込まれ、その上で否定されているのであり、諸行が始めから考慮外に置かれているわけではない。また（本書の概観ですでに紹介したように）『選択集』は浄土宗の立宗を意図しているが、それは浄土宗を他の諸宗と並ぶ一宗として立てるということで、諸宗の否定ではない。

このような総合性をさらに徹底して追求したのが日蓮であり、日蓮の場合も単純な排他主義ではなく、念仏・禅・律・真言の諸行がすべて摂取されたものとして『法華経』を捉え、総合仏教の確立を目指している。

親鸞についても、晩年の和讃を見ると、神祇信仰を否定しているわけではなく、神々の世界の頂点に阿弥陀仏を位置づけている。（これは親鸞の不徹底性と捉えられることもあるが）もし親鸞が阿弥陀仏だけを崇拝して他をすべて否定しているのであれば、親鸞自身の聖徳太子や法然に対する崇拝もおかしいことになってしまう。

「中世仏教の形成――平安仏教から鎌倉仏教へ」では、平安仏教から鎌倉仏教への展開を中心に、中世に至る日本仏教の歴史が概観されている。

「東アジア仏教と東アジア周縁仏教――『釈摩訶衍論』の流伝を中心に」は、本書のなかではいささか異色な章で、前半では、中国を中心とした仏教受容が概観され、さらに中国の北方の契丹における仏教の展開が紹介されている。契丹では『釈摩訶衍論』が重視され、高麗続蔵経には契丹撰述の著作も多く含まれている。中国での『釈摩訶衍論』の流布は限られたものだったのに対し、日本では空海が重視したことで知られているが、院政期から鎌倉期にかけて、高麗続蔵経の輸入とそれによる『釈摩訶衍論』研究の流行がおきており、東アジアにおける仏教展開のダイナミズムの一端を紹介している。

「仏教と身体性」第一節の「仏教の身体論――キリスト教との比較から」では、前半では、近代的なキリスト教と聖書解釈の流れでは、イエス＝キリストの神性を剝奪して「人間イエス」を明らかにすることに主力が注がれたが、近代的な合理主義、人間主義の極限化が伝統宗教への回帰を促したことを紹介し、今日のキリスト教における「霊」と身体の問題を概観している。

後半では、それを踏まえたうえで仏教における身体の問題が取り上げられ、『倶舎論』の輪廻と母胎における胎児の生育の理論が紹介されたうえで、本来、輪廻についての理論であったものが、中世の密教では即身成仏の実現のプロセスの説明に使われており、それが中世密教の大きな転換であること、しかしこのような生命の重視はその後、神道で展開し、仏教では異端視されてしまったことを指摘している。

第二節「立川流と『受法用心集』」では、立川流の最古の批判書とされる『受法用心集』について、従来知られていたものとは別系統の写本が高山寺で見つかったことを紹介し、彌永信美の新説（「いわゆる「立川流」ならびに髑髏本尊儀礼をめぐって」、『智山学報』六七号、二〇一八年）の内容を紹介しつつ、立川流についての通説を批判的に検討している。

従来の研究では性的な言説と性的実践がごっちゃにされているが、性的言説は「正統」派でも用いられており、著者が調査に参加した真福寺所蔵聖教のなかから、栄西『隠語集』、癡兀『東寺印信等口決』における例を紹介している。

『受法用心集』で邪義として批判されているのは、性的な言説一般ではなく、髑髏に男女の和合水を塗って反魂香を焚く髑髏本尊を本尊とする吒枳尼天法である。

十三世紀には、性的な言説や「外法」的な呪法を含めて、密教の多様な実践や理論が展開されており、それが正統と異端に切り分けられるなかで、多様な可能性が狭められていき、密教から切り捨てられた異端的な要素は神道・修験道・陰陽道などに継承されていった。

ここでは紙幅の都合で、第Ⅰ部の内容を中心に紹介してきたが、本書の扱う範囲は、『禅の中世』という表題から想像される中世の禅に留まらず、中世にいたる日本仏教の展開、東アジ

ア仏教という視点からの日本仏教の位置づけを含む広大な範囲が取り上げられており、実践法としても禅だけなく、密教、念仏なども論じられている。

それらについて、近年の研究を踏まえたうえで従来の説が批判され、しかもその資料として第Ⅱ部で紹介されている『中世禅籍叢刊』全一二巻＋別巻（臨川書店）が刊行されている。

中世の仏教に関心のある若手研究者は、本書を読めば、論じられるべきテーマ、参照すべき先行研究、テキストの所在を知ることができる。

評者が若い頃、日本文学に関してだが、重要なテキストについて、取り上げるべき研究テーマ、先行研究などを一冊で紹介する『必携』シリーズが刊行されていた（学燈社）。本書は研究を志す者にとってはまさに「必携」すべき本である。

従来の仏教理解は、日本仏教の研究者以外の間ではいまだに根強い。そういう人にとっては、『中世禅籍叢刊』の内容紹介を兼ねた本書は情報量が多すぎて、気軽に手に取ることがむずかしいかもしれない。

本書を契機とした研究のさらなる進展を期待すると同時に、より平易に概要を紹介した一般向けの本があると、多くの人に利益することになると感じた。

（中村元東方研究所専任研究員）

澤井啓一著

『伊藤仁斎――孔孟の真血脈を知る』

（ミネルヴァ書房・二〇二二年）

阿部光麿

一

伊藤仁斎（一六二七～一七〇五）の生涯、人柄やエピソードとして思い浮かぶのは、どのようなものであろうか。

市井の学者、京都の町衆、朱子学との対決、引き籠もった時期がある、その時期に交流のある人は一人だった、生涯原稿を書き直し続けた学問の人、温和ないいひと、地元の人たちと井戸さらいをした、全力で節分の豆撒きをした、子どもの為に着ていた衣服を質入れさせた赤貧の儒学者……。後半に挙げたものは、些か過剰な演出で知られる儒学者の評伝集、原念斎『先哲叢談』に出典をもつ。赤貧の逸話は教科「国語」の検定教科書にも掲載された時期があるので、研究以前の記憶に残っている方もおられようか。

一方、前半は既存の仁斎研究にもしばしば描かれる姿だが、中には仁斎の長男・東涯の「先府君古学先生行状」（『古学先生文集』。以下、それぞれ「行状」『文集』と称す）特有の描写に引